

〈解答例＝内倉〉

設問1：

死を決意した森の中でたまたま見つけた無傷のりんごの木が、死を踏みとどまらせる契機となったということ。

設問2：

高度経済成長期を境にして、日本の家庭スタイルは親子三代が同居する大家族から親と子どもだけで構成される核家族へと移行した。核家族化に伴い、それまで親から子へ、子から孫へと伝承されてきた生活習慣とそれを支える心のあり方が、現代の家族には希薄になってしまったことがここで言う「時代的な素地」である。

設問3：

問題の一つは、本来、私たちの命を支える生き物やその生き物を育んだあらゆる自然に対して表されるべき「ごちそうさまでした」という言葉を、母親が料理を作った者の労働に対するものとはき違えていることである。また、問題の二つ目は、給食費を払うことで「ごちそうさまでした」と言うことが免除されると考える母親の価値基準が、金銭的な価値を尺度とし、私たちが大切にすべき心の価値というものを見失っていることである。

設問4：

A＝一筋の光明（希望の光、一条の光）      B＝感性の衰退（感性の減退）

設問5：

私が大切にしている「心の習慣」は、日々の生活の中で、自己と自己とをとりまくあらゆるものとの繋がりを強く意識することだ。家族や友人といった近い人は言うまでもなく、日々使用する日用品なども、それらを考案した人、作成に携わった人、私のところまで運んでくれた人などを想像すると、会ったことがない人とも意識的な繋がりが持て、物の価値を実感できる。また、繋がりを意識することは、日々口にする食べ物についても、貴重な認識を与えてくれる。食べ物はすべて自然の生き物であり、その命によって私の命が支えられていること、つまり、食べ物は人の命と等価であることが認識できるのである。